


神田日勝記念館 だより

 神田日勝記念館 〒081-0292 北海道河東郡鹿追町東町3丁目2 TEL (01566) 6-1555



作品C 1969年

Contents

- 2 同級生が語る「神田日勝の少年時代」
「神田日勝が見た笹川」〜笹川小学校の取り組み
- 3 日勝祭(神田日勝生誕祭)
第十回馬の絵作品展(岩内)
第十回ふるさと子ども美術展(鹿追) 同時開催
小檜山博 著「ほくの本音」発刊
「馬(絶筆)」登場する内田康夫の小説、
二度目の文庫化
「美術館を楽しむ」が神田日勝記念館と
「室内風景」紹介
- 4 平成十八年度特別企画展
「さそぎられた世界」
多賀新展
- 5 アート・キッズ・クラブ
秋季子どもワークショップ
子ども芸術鑑賞ツアー
冬休み子どもワークショップ
- 6 寄稿文「随想的に「神田日勝」」 中谷 有逸
- 7 寄稿文「神田日勝の思い出」 鈴木 孝一
- 8 絵画教室「油絵講座」
感想ノートより⑩
「十勝の農村風景」
(後期常設展)

2005.3.31

22

同級生が語る 「神田日勝の少年時代」

平成十七年度は、神田日勝の小中学校の同級生を中心に聞き取り調査を実施しました。日勝は健在であれば現在六十七歳。
十勝に在住する方々を中心に、日勝との思い出やエピソードなどをうかがいました。



高野 賢さん

鹿追中学校で同級、学校の行き帰りが一緒によく遊んだり話したりして、東京での空襲の話も聞きました。
日勝は陽気で、絵が上手く、卒業記念の写真を撮るときに黒板に背景の絵を頼まれて描いたこと、青年団活動では、演劇などを活発に行っていたことが印象深いです。



大上 義雄さん

鹿追中学校の同級でしたが、親しくなったのは青年団に入ってから。お互いに相撲が好きで、一緒に釣りに行ったり、青年団活動のあとに喫茶店で話し込むような友だちでした。結婚式では日勝に友人代表を頼みました。

日勝は、小学生の頃から絵がずば抜けて上手く、こけいなどがあるが、自分の考えをきちんと持っている芯のある人、という印象。文章も上手く年賀状も改まった書き方ではなく、すばらしかった。
冬の深夜、ブルドーザーで除雪をすると、日勝の家にまだ明かりが灯っており、深夜まで絵を描いていた姿が強く記憶に残っています。



昭和26年、中学1年終了式。後ろから2列目の左から2人目が日勝。



浅見 一郎さん

中学校で同じクラス、席も隣でしたが、日勝はあまり目立たず落ち着いているという印象。自転車通学をしていた日勝に、お昼に自転車を借りたこと、卒業の際にサイン帳に絵を描いてもらったこと、家具職人になり、日勝の家に家具を納めたことがあります。



浅野 誠一さん

日勝と同じ頃に鹿追に移住。中学校で同級でしたが、親しくなったのは、青年時代に演劇活動を通して。よく一緒に飲んだり、舞台背景を日勝に頼んだりしました。ホテル福原に勤務していた頃、日勝に赤い魚を依頼して描いてもらい、今もホテルにその絵が飾られています。
日勝が亡くなって葬儀のときに友人代表で弔辞を述べました。



及川 光男さん

笹川小学校、鹿追中学校と同級でしたが、日勝は小柄でほとんどなく、目立たないという印象。遊ぶグループも違い、あまり交流はありませんでした。中学校で、日勝に絵を手直ししてもらったことがあり、それが強く印象に残っています。

聞き取り調査を通して、日勝の少年時代、そして青年時代の実像が資料として記録されてきています。同級生の方々から、貴重な写真資料なども提供されており、今後、逐次紹介する予定です。

「神田日勝が見た笹川」

笹川小学校の総合学習の取り組み

二〇〇四年十月十三日～二〇〇五年三月二十二日



神田日勝が、その生涯の大半を過ごした地でもある笹川地域。母校である笹川小学校で、全校児童を対象に延べ五十三時間に及ぶ総合学習「神田日勝が見た笹川」が行われました。

日勝をよく知る笹川在住の方々四名と記念館職員の五名が協力して、農業、昔の遊び、昔の食事、そして日勝の絵画についてグループに別れて学習して、それぞれの成果をお互いに発表しました。



郷土を、神田日勝の生きざまと絵を通して学習する画期的な取り組みで、教員と児童が一丸となり、また地域の人々も熱心に関わることよって、日勝が少年時代に、どんな生活をしてきたか、どんな遊びをして、食事をしてきたかが追体験でき、日勝の絵に対する見方も変わったようです。

神田日勝の作品「静物」の世界を立体的に紙ねんどで再現する授業や、鑑賞学習では、児童が自分が選んで下調べをした作品について説明しました。

昔の農機具の見学を通して、日勝が描いた馬が、どんな農機具を身体につけてどんな仕事をしてきたかを学習し、馬そりを製作して、雪山から滑って遊ぶことも体験できました。



笹川小学校でのこのような取り組みが、さらに町内の小中学校に広がり、神田日勝への理解が深まることが期待されます。

日勝祭(神田日勝生誕祭)

二〇〇四年十一月八日
鹿追町民ホール・神田日勝記念館



神田日勝の生誕祭「日勝祭」は、今年で二回目。町民ホールで、小檜山博館長の講演会を中心に行われました。

館長は「小説も絵画も、どう云う作品が生まれるかは、どう云う生き方をするかにかかっている」という日勝の言葉を引用して、「考え方の成熟度が早く、亡くなる時には既に完成された画家だった」と述べました。



また、街作りにも言及し、「自分たちが、まづ住んでいて楽しいと思える町にすることが大事。それがひいては観光に結びついてゆく。地域の産業である農業を大切に、地元で収穫された農産物をもっと町の人たちが食べましょう」と話しました。



三十人余りの参加者は、講演のあと、会場を神田日勝記念館に移して、懇親会が開かれ、神田日勝記念館友の会の会員や、帯広から駆け付けた日勝ファンが、日勝の誕生を祝い、楽しいひとときを過ごしました。

木田金次郎美術館と交換展

「第十回ふるさとこども美術展」(鹿追)
「第十回馬の絵作品展」(岩内)
二〇〇五年一月十七日～二十七日 鹿追町民ホール



馬の絵作品展(岩内)

神田日勝記念館と木田金次郎美術館は、地域とともに生きた画家の作品を展示する美術館として交流を続けています。

今年「第十回馬の絵作品展」の巡回展を岩内町の木田美術館で開催。入賞・入選・佳作を合わせた九十五点が展示されました。また同時期に、鹿追町では、木田美術館の「第十回ふるさとこども美術展」の入賞作品四十点が展示されました。



ふるさと子ども美術展(鹿追)

「ふるさとこども美術展」では、「夏の羊蹄山」などの後志地方ならではの作品や、トラクター、自転車、スキーをするともだちなど、身近なものをのびのびと描いた作品が並びました。

一方の、「馬の絵作品展」は、全国から応募された一五五七点の中から選ばれた作品群で、文部科学大臣賞に選ばれた牧場の柵から顔を出した馬や、親馬と仔馬の触れ合いを描いた作品など、表情豊かな力作が展示されました。

小檜山博 著「ぼくの本音」発刊



小檜山博館長の「ぼくの本音」が柏艸舎より出版されました。表紙には、神田日勝の「飯場の風景」が採用されています。内容は近年の新聞や雑誌に発表されたエッセイを集めたもので、日勝の「室内風景」「飯場の風景」についての文章も収録されています。

「馬(絶筆)」登場する 内田康夫の小説、二度目の文庫化



神田日勝記念館が登場する内田康夫のミステリー小説「幸福の手紙」が、光文社文庫に収められ、刊行されました。(一九九九年に新潮文庫としても刊行)

この作品は、探偵・浅見光彦が活躍するシリーズの一冊で、十勝一帯が小説の舞台として登場します。

記念館は、殺人事件の重要な場所として、物語の中にも紹介され、グラビアで神田日勝の「馬(絶筆)」もカラー写真で掲載されています。作者自身の解説にも「想像を絶する『半分の馬』と遭遇することになる」と述べており、この作品との出会いが重要なキーポイントにもなっているようです。

週刊朝日百科 『美術館を楽しむ』が神田日勝記念館と「室内風景」を紹介

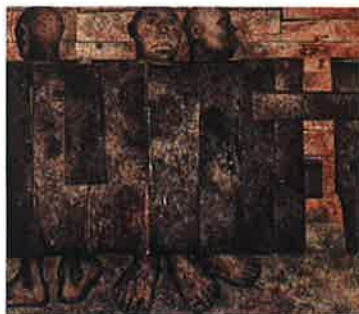


週刊朝日百科「美術館を楽しむ」の「北海道立近代美術館」に、神田日勝記念館と「室内風景」が紹介されています。

北海道において、神田日勝が重要な画家であることがうかがえます。

平成十六年度特別企画展
「さえぎられた世界」

二〇〇四年十一月十六日〜二〇〇五年一月十六日



神田 日勝 「板・足・頭」 1963年

板壁と板扉によつて二重にさえぎられた空間に三人の男たちが足と頭だけ描かれています。背後はどのようなのか、そして男たちはどんな姿なのでしょう。か…。



山口 健智 「壁」 1965年

今回の特別企画展では、神田日勝の作品の大きな特徴である、奥行きを遮断して、背後に広がる空間をさえぎること、つまり「壁」に焦点をあてています。「壁」を主題にしたもの、といつてもさげすまざらぬところがあります。

壁そのものを描いた山口健智と伊藤光悦の作品では、丹念に描かれた壁の落書きや傷によつて、そこに不在の人間の存在を連想させ、一種の心象風景のようにも見えます。

上野憲男と亀山良雄の作品では、具象絵画が追求してきた三次元空間を二次元のキャンバスに再現することをやめて、キャンバスを壁に見立てて平面性を強調しています。一人はともに抽象表現へと向かうことになりませんが、その過渡期の作品でもあります。前者はキビシムの厳格さを、後者はブルーへのこだわりから情豊かな絵画空間を展開しています。

寺島春雄は、重厚な画肌で抑圧された人間の葛藤を象徴的に表現し、壁が人間を閉じこめるものとして描かれています。

岡部昌生は対象を直接擦りだすフロッタージュで知られていますが、夕張の閉山になった廃坑跡をモザイクのようにフロッタージュして、人間の営みの痕跡を追求しており、一原有徳はモノタイプという一点刷りの版画からスタートして金属版やオフジェも制作して国際的にも評価の高い作家ですが、壁の表面の材質感を版に表現し、二人とも抽象的表現ながら、壁を強く意識した作品を制作しています。

北岡文雄は、板目木版による多色刷りで写実を基盤に抒情的な作風で知られていますが、版木の板目を板戸として効果的に表しています。



寺島 春雄 「柵と人」 1957年

神田日勝と、これらの作家の作品とを対比すると、「壁」が造形的な表現の手段、いわば平面性を強調するもの、人間の前に立ちはだかる心理的な効果を与えるもの、人間の営みの痕跡を象徴するもの、そして壁そのものの表面の材質へのこだわりが見られました。



亀山 良雄 「図式的人間」 1955年

日勝の作品には、描かれたものの存在が前へ前へと浮き出てくるような錯覚を見る者に与えます。



上野 憲男 「壁ざわの男」 1978年

これは、さえぎられた「壁」によつて見えな何かをさぐる一つの空想力を強いることと、存在の確かさを見る者に感じさせる力が潜んでいるように思われてなりません。

一九六五年 出会いから四十年
多賀新展「銅版画・鉛筆画」

二〇〇四年十一月二十日〜十四日

神田日勝記念館2F展示室



魚 No.8 1978年

本別町出身の版画家多賀新の作品展が神田日勝記念館と本別町中央公民館で同時に開催され、それぞれ三十点の作品が展示されました。

多賀新は、生前の神田日勝とは帯広市内の珈琲園、弘文堂画廊での個展を通して面識があり、三度目は没後の全道展帯広巡回展で、「室内風景」に遭遇、圧倒されたそうです。



禱 2004年

神田日勝記念館では、一九六五年出会いから四十年、本別町では里帰り初個展というサブタイトルがつけられました。

多賀作品は、モノクロの画面に精緻(せいち)で幻想的な作風で知られており、来館者の中には、じつとくいいように作品を見つめている姿も見られました。



多賀新 略歴

- 1946 本別町生まれ
- 72 日本版画協会展
- 77 日本現代版画大賞展
- 80 日本の版画展
- 83 セントラル版画大賞展
- 83~84 文化庁在外研修(米国・西独)
- 86 版画の新世代展
- 2001 北海道立帯広美術館企画個展
- 02 ケンブリッジ大学教授
- 04 四国88ヶ所へんろ文化と美術展
- 現在 日本版画協会会員

アート・キッズ・クラブ

二〇〇四年五月二十二日～二〇〇五年二月二十六日

鹿追町民ホール

週末活用の気軽に楽しめる工作少年団のような形で始まったアート・キッズ・クラブ。

十二月以降のプログラムは、飛び出すくみのクリスマスカード、昔からあるお正月遊びの福笑いとして、く、野外での雪だるま作り、そして神田日勝の「馬（絶筆）」を塗り絵風に仕上げるといった内容で実施されました。

参加者は延べ四十一名で、父親や母親も飛び入りで参加するなど、次第に広がりも見せ始めました。

参加した子どもたちは「もっと時間が欲しい」「外で作った雪だるまは楽しかった」「おもしろいものをたくさん作りたい」など意欲的でした。



最終回は神田日勝の「馬（絶筆）」を他の動物と組み合わせさせて仕上げるユニークな内容で、カンガルーやペガサス、しましまなどの動物と合体させた不思議な動物になりました。



秋季子どもワークショップ

「割りばしで何ができるかな？」

十一月二十七日 鹿追町民ホール



使い終わった割りばしをきれいに洗い、たくさん集めて、くぎを打たずに積み上げるワークショップに取り組みました。講師は建築家で造形作家の吉野隆幸先生。

参加した十四名の小学生は三班に分かれ、それぞれ工夫を凝らしていました。

マジックハンドのようなしくみにするアイデアを出したり、高く高く積み上げたり、割りばしを小さく切つて飾りをつけたり、どんどこイメージが広がっていきます。共同で製作するために、お互いの意見をぶつけて、一つものを作り上げる楽しさや難しさも体験できました。完成作品は一週間、町民ホールのロビーに展示しました。

子ども芸術鑑賞ツアー

「ピノッキオ★その誕生から現代まで」

十二月十九日 北海道立帯広美術館



童話「ピノッキオ」のルーツの紹介、イタリアの操り人形、画家が描いたピノッキオの挿絵、そして日本に入ってきたピノッキオ童話など、興味深い内容で出口には大きなサメの口が…

参加した小学生は、それぞれの展示に熱心に見入っていました。

冬休み子どもワークショップ

「オリジナル小皿を作ろう！」

十二月二十八日 鹿追町陶芸工作館

陶芸のワークショップは人気が高く、昨年に引き続き行われ、十七名の小学生が参加しました。

今回は、オリジナルデザインの小皿作り。事前に下絵を考えてきてもらい、ねんどを平らにのぼして脇に板を置いて同じ厚さに切りそろえます。へらでねんどを切り取り、表面にもようを彫つたり、縁を持ち上げるようにして皿状に加工します。



陶芸工作館職員の熱心な指導で、参加した子どもたちは、みな集中して取り組み、後かたづけもきれいにできました。ハートや星、動物や花、そして船や顔など、それぞれ思い思いのデザインで二つ以上製作する人もいて、とても意欲的でした。



成形が終わった作品は、陶芸工作館の職員が素焼き、本焼きを行い、参加した子どもたちは完成した作品を見て、うれしそうに持ち帰りました。

寄稿文

随想的に「神田日勝」 中谷 有逸

私が帯広へ転動して来たのが昭和四十七年。それまで、残念ながらご本人にお目にかかつていず、所属する団体も異なり交流もなかった。帯広に来たとたん押し寄せるように入ってくる「日勝」さんの情報は、当時既に伝説になっていた『神田日勝』のものであった。しかし、こんな私にも現実の世界で全くご縁が無いわけではなく、日勝さんのご息子が私の勤める帯広卒業高校に入学され、美術の授業と美術部の部長と顧問の関係で、三年間の時間を共にした。また、現在の「神田日勝記念館」建設に際し、

学識経験者？と言う立場で、正式名称は失念したが「委員会」の末席を汚していた。完成した建物にはその折申し上げた意見も少しは取り入れられていると自分だけで錯覚し、密かに誇りにも思っている。

それにしてもこの建物ほど外の姿、内側の様子を直に見て充実感を得られるものは滅多にない。単に潇洒と言うのではなく、回りの大地の光景にピッタリと合い、力強く彫刻的ときえ言える造形美で屹立している。内部はロマネスク寺院を連想させる荘厳な空間を造り、展示作品群の放つ魂の叫びで時代や世代を超えた鑑賞者に有無を言わせない感動を与えてしまう。だが私はこの場所に余り近付かないようにしている。決まって「そのトシまで何をやってい

たんだ！」と日勝作品達と私の内なる声にこっぴどくヤツツケラレルからである。



「室内風景」部分拡大図 (左図・1970年)
「室内風景」(右図) 北海道立近代美術館蔵

話題はこの美術館から離れるが……札幌の近代美術館に収蔵されている神田日勝の代表作、完成作品としては最後の作品と聞いている『室内風景』と対

面する時、いつも「気」になり、不思議で仕方がないのが、画面中央下方にいる女の子の人形の存在である。それは、画面中央の「彼」の左足の爪先にある木箱の上に置かれ首を箱の縁から逆さにさげ髪の毛を床につけ悲しげな視線を左方向に向けている。その腰あたりには横長にやや大きめのピンクのタオルが掛けられ、人形の衣服の赤と顔の明るい朱色などが、作品の中で異様に目立ち、別世界のもののように思える。画面下部の右手奥のスケッチブック、左下のバッグと共に、広い新聞をはった壁面の重さを支え回転運動を起こす構図上の重要な役割を担っているのだが、どうしてこんな派手なものがあるのかここに必要なのだといつも思う。人形のこの日勝作品以外における役割はと、入手できる限りの資料を検討してみたが、このような人形を見つける事ができなかった。何か別な意味

合いがあるのではとつい考えてしまう。

どなたかも言っていたけれど、この絵の中の登場するものたちの、微妙にシンクロしないけれど、画面になんとも不思議な緊張感を生んでいる、のだろうか、それにしても、この人形の存在は不思議で仕方がない。

『室内風景』は、作家的な立場の私の目には、「風吹きささぶ色彩の原野での試練を乗り切り、新しい心象世界の荒地に足を踏み入れた日勝のランドマークの作品」と見えてしまう。

この人形はもしかするとその荒地にまだ戸惑っている「日勝」を導く女神なのではあるまいか、それとも別の心理的な意味合いがあるのだろうか？などと、また、つい思い悩んでしまう。

いくら目を凝らしても、以後続々と生み出されたであろう日勝の幻の作品群は、私の想念の中で揺らぐのみである。改めて無念。



著者 略歴

第5回北海道現代美術展(優秀賞(1982・道立近代美術館)・札幌アヴァンギャルドの潮流展('94・同)美の現場=中谷有逸展('95・道立帯広美術館)・十勝文化賞('96)・アジア・プリント・アドベンチャー展('98, 2003)。中谷有逸 現在・過去展('98・藤丸デパート)モダンアート協会会員・道展会員。

寄稿文

「神田日勝の思い出」

鈴木 孝一

私が神田日勝と初めて出会ったのは、太平洋戦争終結直後の昭和二十年の秋、笹川小学校二・三年生の教室ではなかったかと記憶している。

当時の笹川小学校は、複式校で変則の学級編成がされていたような気がする。各学年二十人以上の児童生徒が三つの教室にひしめき合うように机や椅子が並べられ、身動きもできないような教室で日勝との付き合いが始まる。家族の方に連れられて教室に姿を見せた日勝はりりしい少年でした。当時の校長（渡辺渉）が日勝が太平洋戦争終盤の東京空襲を逃れて家族全員で当地に疎開して来たのだと紹介してくれた。本町を永住の地として笹川北十一線七号付近の国有防風林の中に住まいを構えて、まったく経験のない大地の開拓作業に家族で汗を流していた姿が今も目に映り、忘れることは有りません。

私達と日勝は通学道路も方角の同じ部落にあつたことから、常に学校へかよう行き来は一緒に、道端の草木に触れ朝露で靴の中がびしょぬれになりながら、でこぼこな石ころだらけの馬車道を近所の悪ガキ達と数人まとまりながら、何を話していたかは覚えていないが、楽しく通学していたことが思い出されます。



鹿追村連合青年団主催の芸能発表大会において、演技賞受賞。神田日勝（左）鈴木孝一氏（右）昭和32年頃。

日勝はよく校舎の窓辺から（半紙板ガラス九枚入りの窓枠で出来た窓）広がる風景を眺めては、当時の質の悪いノートによくスケッチしていたことが思い出されます。当時の校舎から見える風景は、東隣に笹川神社、南側は馬を数頭飼育して生計を起している方が住んでいて、柏の大木や小柏の林がうっそうと茂る自然が一杯の景色を眺めることが出来ました。そんな景色が見渡せる窓辺で、よく馬の絵を描く日勝の姿が見られました。時にはクラスのカギ大将が、窓辺から見える数頭の馬が群がる姿を画用紙に描くよう命じては、日勝がそれに答えて描くこともありました。日勝の周囲にはクラスのみんなが群がり、人山に囲まれてノートの端に馬の絵をいとも簡単に描く彼の

姿に見とれていたことなどが思い出されます。全校の児童が思い思いに活動しているグラウンドの片隅で、日勝が校庭を画用紙に見立てて木の枝で馬の絵を良く描いていたことも、私の脳裏から忘れることはありません。彼は、このころから絵心のある天才的な才能を持つ少年であつたのではと私は思っている。

日勝とは同年齢であることから、小学校・中学校を卒業後は共に親の家業である農業を手伝いながら、四日Cや青年団活動を通して、山登りや魚釣り、地域の秋祭りには青年団活動として笹川神社の奉納相撲を計画し、その余興として花を添えて身体をぶつけあつて、頑張りあつたことも良い思い出として、私の青春のページに今もその光景が脳裏から消えることはない。



著者 略歴

1936年鹿追町生まれ。
1952年から農業に従事。
1957年から、鹿追農協勤務を経て、1968年から鹿追町役場勤務。1996年から2002年まで鹿追町商店街近代化推進協議会勤務。

感想ノートより ⑱

絵はよく分かりませんが、ずーっと「馬」を見たくて何年もたちました。私が農馬にいただいていたイメージと同じ感じ方を今日知り、涙が流れそうでした。現代の私たちは生き方、自然の尊さを真剣に考えなおさなければと強く感じました。あの馬の「目」のような淋しさをもつ人間が多くならないことを祈ります。 8/9

札幌市 S

神田日勝という暗い作風というイメージがあったが、今回はじめて色彩のあざやかな作品も制作していたことを知った。だが、色彩はあざやかではあるが、絵を見ているとどこか暗く感じられた。

P.S. 「室内風景」を生で見てもみなかった。 9/10
上士幌町 R.T

スゴク感げき
とにかく絵が浮き出ているみたい
こんな絵を見たのははじめて 10/10

札幌市 2人

どの絵もととても感動しました。
どれも何かをうたえているような気がして、特に、未完の馬の絵の前に立つと、思わずなみだ目になってしまいました。本当に来てよかったです。 10/16

札幌市 中学2年

長い間の念願を果たしました。
今にも馬の鼻から白い息が出てきそうです。 11/6

力強さと繊細さ 両方をそなえた作品に心打たれました。
他の作品も見てみたいと思いました。 1/30



絵画教室「油絵講座」
一月二十四・二十五・二十七・二十八日

神田日勝記念館

初心者を対象とした油絵講座が四日間行われました。講師は村上俊彦先生。静物画を制作しました。果物や瓶、それに布など、モ



チーフの立体感や質感などの表現方法について、ていねいな指導が行われ、最終日には、それぞれの完成作品の講評が行われました。



「雪の農場」1970年



「黄昏の農場」1969年

「十勝の農村風景」(後期常設展)

一月十八日～四月二十四日

神田日勝は、宮農のかわら油絵を描いていましたが、農作業そのものをモチーフにしたものはほとんどありません。

上の二点の作品は、二連のサイロと建物の形が似ており、しかもほぼ同じ方角から眺められた構図になっています。

どちらも日勝の最晩年の作品ですが、大作とはちがひ、あくまでも写実的に描かれています。

後期常設展では、この二点のほかに晩秋の収穫の時期の畑を描いたものや、湿原で草を食べている馬の群れなど、十勝に多く見られる風景を中心に「十勝の農村風景」を小テーマとして展示を行いました。

「雪の農場」には馬が描かれていませんが、画面には雪を踏みしめた跡があり、人と馬が通った気が感じられます。

この作品の下絵となったデッサンには、馬がソリを引いている姿が描かれ、構想段階の作品として比較して見るができます。

日勝が生きていた一九六〇年代を知る人々には郷愁を誘い、若い世代には、馬と人とは共に生きていた生活を想像させてくれます。